

沈氏七教集

万

911.3

八



詩庭任  
井上氏

怪跡

桂  
江

炭俵序

はたまたと標ある孤念理... 乃文章の野風を... 蒼蒼とくわふ... 乃文章の野風を... 蒼蒼とくわふ... 乃文章の野風を...

105

ま... 乃文章の野風を... 蒼蒼とくわふ... 乃文章の野風を... 蒼蒼とくわふ... 乃文章の野風を...

わ  
～  
～  
～

乙辰七乃平夏同すんき神三日 未就書

むりくんのりと日乃出る山嶺ハ  
芭蕉

今乃と終子乃 倅  
芭蕉

家重乃とまのてまよとく其  
全

上乃多うりにあふる米乃並  
芭蕉

香乃口くくくくくく月乃全  
全

教哉くあいあよ乃くゆき  
芭蕉

法政く果めくくくくくわく比  
芭蕉

娘と髪く人なりあはあぬ  
芭蕉

象良くくくくくく細基の  
芭蕉

こくくハ百乃姉くぬく肉  
芭蕉

秋くくくみくくくくく向の窓  
芭蕉

ゆくくくソハ物れ丹袋乃 奉  
芭蕉

浴着有尼の持病とゆきくく  
芭蕉

こんばや九をくり素くくく月  
芭蕉

を川下ノ舞舞下地素くくく  
芭蕉

赤瓜あもふ居合ひくぬ交  
芭蕉

町荒乃にくらくく碓く素乃屋  
芭蕉

門く押あく壬生乃念佛  
芭蕉

左風くく異くくくくくく吹中  
芭蕉

あくく居るくん脈とや川らぬ  
芭蕉

江戸の右左むらじの亭にやうれ、  
 二所はもりけしうゝ白をうけ  
 方くくは十敷乃月まゝの喜  
 相の本るるく月さゆゝし  
 門志りてまきつて新なる面を  
 目らふく今も表うく十一分  
 ころつ午よ女房乃おやに推舞て  
 又このころもまきつてゆぬ中平人  
 法平乃湯浴を送る花さより  
 なはふをとりうゝまきまか出来  
 どの家も茶の方不<sup>ウ</sup>茶とあり  
 眞り喰<sup>ウ</sup>所くもま乃<sup>ウ</sup>雑炊

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉  
 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

子くく啼一転くまきまうたり  
 未を乃乃乃のそくぬき母用  
 境へまきまきせぬ娘とられまき  
 展風の降りみゆるる益

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

三吟

兼好光延蔵かりまきまうり  
 あとみや首より花鏡考る  
 序原まきまきの出飯乃くまきま  
 介をまきまきに困り相撲場  
 子福もまきまきまきのまきま  
 子福もまきまきまきのまきま

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉  
 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

深淵をもちよ流すのこころん  
ありらちけれを道先よふら  
隣々々々々々々々々々々々々々  
て〜〜〜〜〜も笑えるのわり  
悪に谷乃九ちハ景情を護成  
五百のうけをう度になり  
綱ぬき北の分の流あるまはる  
人のさか〜ぬまき悪むあり  
執役乃執を下せしむら  
銀を中〜ある羊とあか月  
海と雨降や〜して秋の風  
影ひみて〜ハ又斬りく

岩者  
利半  
世破  
岩者  
利半  
世破  
岩者  
利半  
世破  
岩者  
利半  
世破

抱揚る子の小枝とよら  
く〜〜〜と河内乃若相送る  
心み〜〜〜策乃せん多く  
婿〜〜〜娘の世々々々々々  
こ〜〜〜乃ちれハ行も唯りぬ  
至佛の御文は〜とよら  
け〜いわいの小糸とよら  
黍乃穂ハ秋〜風吹雨  
百場乃喧嘩の終りす月  
者ハさ〜〜〜〜人にある  
今〜〜〜〜〜

岩者  
利半  
世破  
岩者  
利半  
世破  
岩者  
利半  
世破  
岩者  
利半  
世破

賣のうらうらうつて心をなほす文証

芭蕉

夕のししとゆきのうらうら

利半

鎌倉乃の使きくをた走らざる

芭蕉

うらうらとま乃志れぬ細引

芭蕉

枯あるかきとすしめく木乃付

利半

まじりひ残る正月の録

芭蕉

ふた川よさうらうて

芭蕉

空を走乃にさきたり麦の縁

芭蕉

空乃乃のうらうらうう川

芭蕉

上流と通すぬけの雨つて

芭蕉

了つと乃をけん海乃宛中

芭蕉

管のよけりわくをぬる月

芭蕉

うらうらと塚乃ころよ秋風

芭蕉

あうらうら新乃下うらうら

芭蕉

晩のけり乃ユまよるこ

芭蕉

妹をよのけりうらうらうら

芭蕉

信知のりうらうらうら

芭蕉

風ゆうらうらうらうら

芭蕉

家のあうらうらうらうら

芭蕉

縁けりうらうらうらうら

芭蕉

茶のあうらうらうらうら

芭蕉

このままハまうらうらうら

芭蕉

うらうら 柳 歌今ふりうらうら

芭蕉

名  
若乃經吹之々々  
孤屋  
芭蕉

不可存名際と申乃わかき  
岱水

と向ち坊をよとあ  
利半

ほろり内をよた  
芭蕉

墨子よわらわの  
孤屋

若のすたにさ  
利半

安をよ送る  
岱水

今の中は常れ  
孤屋

手責丁ん  
芭蕉

息笑又  
岱水

堪忍する  
利半

若月の中は  
芭蕉

此  
孤屋

このころ  
利半

山乃根際乃  
岱水

よと  
孤屋

眺乃よ  
利半

若死  
芭蕉

余乃九  
岱水

芭蕉  
孤屋

各九句  
利半

各九句

百韻



子々孫々をててまゝ早苗糸  
 容のいそぐのまゝ白よさく  
 雨あぐり深敷蠶婚の所ゆて  
 とり力断りしむりし西々勢  
 竿竹ふ葉糸乃池たぐりし也  
 三々離れりりりり人糸  
 雲乃丸干葉乃茹けりりは  
 掃たる冷りり檀あるこ  
 ぢいめし中てりり知れりりほあ  
 坊をたあれりりやりり仁平以  
 松坂や矢川へたのれりり通り  
 腰もつりり園乃水

利牛  
 船坡  
 孤屋  
 利牛  
 船坡  
 孤屋  
 利牛  
 船坡  
 孤屋  
 利牛  
 船坡  
 孤屋

ナ二三弁乃衣裳乃ちをりり  
 本堂けりり海まけりりりり  
 日乃あゝる方をあゝるむ竹の色  
 長青翠葉りりはにすりりりり  
 辺に路乃りり名詞をりり初て  
 天氣乃乃相よに之りり乃照  
 雲あゝるりり心に折りり心ひりり  
 標の突るるりり根をりりりり  
 常事乃乃為連主糸九りりり  
 此執儀りりりり人まをりりりり  
 けりりりりりりりりりりりり  
 けりりりりりりりりりりりり

利牛  
 船坡  
 孤屋  
 利牛  
 船坡  
 孤屋  
 利牛  
 船坡  
 孤屋  
 利牛  
 船坡  
 孤屋

たよい種を妙りてその名もあは  
なす 羽の糸もよひつゝ人傑  
候しよふふ武士の為のつゝ  
尚おれふり今より大野  
切蠟の喰ひ候しと植たんと  
くろくろ納豆と仕込廣庭  
瘡りてまきくくも付る  
茶てまけくく枝の重くま  
つまあるのなるとくく  
とかり乃重きまき井の中  
のれの舟揚り負ある古植  
すまは長たあまるとつてん

利半 世坡 孤屋 利半 世坡 孤屋 利半 世坡 孤屋 利半 世坡 孤屋 利半 世坡 孤屋

ひつとと血をさる 淨土寺  
産てくくくみく 水風をたす  
伐透り根と檜のすどあひて  
赤ひ小まふハあくくくき内  
候とハ霜の男此あとうくえ  
陣まは丘尼乃流りまは  
條橋北のいとくく賞まそ  
天満の状と又とあれり  
廣種をくくくく 船乃宿  
印く 記ありてくく 親者  
惣まきり 菊を尻も持て  
十に五あ乃くくく

利半 世坡 孤屋 利半 世坡 孤屋 利半 世坡 孤屋 利半 世坡 孤屋 利半 世坡 孤屋 利半 世坡 孤屋

内なるよきはゆめゆめの終るる  
弦亦感懐中よとよ痛  
二 棧羅終るいこを屋に記うり  
小豆をまじらるる静し  
楓陽よ勝るる足とかけ出で  
細乃終るけを念入るる心  
麦畑の習性よ海を清く杭  
幸子もまじらるる折故の心  
物ももつ持よけられたる心  
又心身の古き心いりりり  
城まじらるるよよれたる心  
くまじらるる心いりりり

利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡

一 つくちりよ 龍乃中 揚  
跡所よ 蕪引ちきる 終乃内  
たよめすよよる 幸子の味あふ  
めを海とく 幸子の味あふ 龍の愛  
又たのみりてよははたすりき  
かよよん中の己れをすつと  
入来る人なり 味あふを思  
ちちうのよ 幸子の味あふ 終乃内  
水菜屋乃 及びの岩乃 及びの  
けちくんとんと 及びの岩乃 及びの  
お茶よ 終るる 及びの

利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡 利半 孤屋 母坡

紫乃心引織く居る松示  
 尻好くひくぬるゆのよく  
 ありくくくくくく時乃る乃る  
 人毎つてく肉乃六肉  
 拭きくお攻の安居りくく  
 湯云つもの細くくくく  
 大乃乃あつた細乃あつた  
 何年善托くまぬ枋乃其  
 交合くく同心乃あつたと  
 九九十日 極とわりりり  
 投亦くくくくくくくく  
 足くくくくくくくくく

利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡

里離れぬ我利乃わくつあく  
 やくくくくくくの松の海りく  
 去りくくく初日よまの精進若  
 くんち果くくくハもお  
 丁寧くく仙甚依乃口りり  
 所弘く海く土くよまの筋  
 夕月く海くくくくくく  
 白て居る。 鞋乃やきくりの  
 空先と今年若風は欲わで  
 九月代社事くくくくくく  
 若者麻の村お別とくくく  
 炎月くくくくくくく

利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡

夢乃の引織く居る松 示  
尻野のひくぬるひよよく  
あらしくくもく時乃る乃る  
人毎つてく肉乃六内  
拭きくお政の愛居ひくひる  
あ云つものゝ廻くくくひ  
大乃乃あぐぬ細乃砂のけ  
何年善抱くまぬ枋乃其  
交合く弓同心乃あくと  
丸九十日 温とわひり  
投亦もくくまうたあつて  
足たうくまうたあつて

利牛

孤屋

世坡

利牛

孤屋

世坡

利牛

孤屋

世坡

利牛

孤屋

世坡

里難れぬ我討乃わらうあ  
やとくくくりのぬぬの海あり  
まきまきく初日あまの精進者  
くんち果くくハオオ  
丁寧くは仙基儀乃旦りり  
折弘く海く土くよある節  
夕月くは醫者名の名をくく  
包て居る。魁乃やきくりの  
定先と今年まねを欲ありて  
もくや社事くもくくぬり  
ア着麻の村オ村とくくく  
夢乃の引織く居る松 示

利牛

孤屋

世坡

利牛

孤屋

世坡

利牛

孤屋

野坡

利牛

孤屋

世坡

減もさぬ 洲路舟のまを乃春景し  
門 建 直 尺 町 乃 相 波  
彼 岸 至 乃 乃 花 の 咲 々 々  
云 人 ち 々 々 々 々 々 々 々 々 々

利牛  
孤を  
抄波  
斑半

春之部 非度句

主 主 主

菫草もよみさそい 夕陽乃初ぼ  
あやもやまの 夕陽乃初ぼ  
みちのく乃乃 夕陽乃初ぼ  
あやもやまの 夕陽乃初ぼ  
あやもやまの 夕陽乃初ぼ

菫草  
夕陽  
みちのく  
あやもやま  
あやもやま

いとう ときまき 雀乃かきとく 梅

雀  
梅

喰つてや 木多の けりひの 梅物

梅物

移いまきき 門徒 坊主 乃 終乃

坊主

目下にも 刺乃 河や 年々 何宮

何宮

初月 彩高 量立 乃 中 終乃

終乃

若松 親の 名を 身も 水香 乃

水香

梅

梅一本 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃

心も 嘆や 向乃 控 乃 乃 乃 乃

乃

むらら 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃

空花 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

むらら 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃

梅咲く湯屋乃山朋をてり  
赤みそ乃足をゆかりむり乃花  
みよくしり咲うわりのく梅乃花  
紅車を娘すまふる書戸ノ柳  
おふこもろ七さくわんまて  
とんちも龍ま白くまあう取  
七多や 糞正あうけく切刻を  
くらむわく若菜摘まを取く  
治より乃え乃く  
残月一足つくりくま  
大くく七 味乃知くま  
おむら内ちことまふらぬ取の

赤川乃ま

長口まやまをのたつるま  
十不日ま中 睡月乃古子愛  
猫乃を意初まうく  
ねこの子のくんつ原を川

山

くくままはほくとま  
まふままく人ん夢の  
くくひまのまに花り  
くくひんヤ 門をたま  
号れてまのまをめより

利牛

遊刀

毘披

板凡

其角

毘披

仙杖

玄采

文茶

仙花

利牛

文茶

世披

其角

虎堂

其角

桃露

丹披

利牛

こわりのきよ〜〜て植一柳の  
陸子ご〜舟のきよ〜柳の  
又人ふち〜とてき〜柳の  
せ〜乃尾の〜舟の 柳の  
町やう人き〜舟の 柳の  
傘の柳わ〜舟の 柳の

椿

土をこ〜羅のちり返枝り角  
枝長く伐らぬ方を椿うね  
念の〜〜〜〜〜  
舞の〜〜〜〜〜  
きのぬも〜〜〜

伽美 志野 世城 一凡 利半 芭蕉

孤屋 湖春 曲登 虎堂 支考

いふの柳原を〜〜〜

花

ふ人の花を〜〜〜  
舞子はらふりの〜  
か〜〜〜  
あ〜〜〜  
あ〜〜〜  
あ〜〜〜

世城

芭蕉 杉凡 夫州

中下も〜〜  
あ〜〜  
あ〜〜

志野 孤屋



あまふと云ふまゝのそよ乃九とさ  
 たりれてはゆのうゝまゝをえし  
 柳の影は若中より垂れ花の中  
 舟舟とく人もやと見えはさのみ  
 あまふと云ふまゝのそよ乃九とさ  
 赤いも毛虫にあまふと云ふまゝ  
 やまのあまふと云ふまゝのそよ乃九とさ  
 赤いも毛虫にあまふと云ふまゝ  
 舟舟とく人もやと見えはさのみ  
 山根小川 赤いも毛虫にあまふと云ふまゝ  
 足布とく人もやと見えはさのみ  
 おしつとく人もやと見えはさのみ

病口  
 斜嶺  
 北枝  
 湖春  
 其角  
 光堂  
 智月  
 之石  
 荻市  
 普全  
 利半  
 全

赤いも毛虫にあまふと云ふまゝ  
 舟舟とく人もやと見えはさのみ  
 山根小川 赤いも毛虫にあまふと云ふまゝ  
 足布とく人もやと見えはさのみ  
 おしつとく人もやと見えはさのみ

上巳

赤いも毛虫にあまふと云ふまゝ  
 舟舟とく人もやと見えはさのみ  
 山根小川 赤いも毛虫にあまふと云ふまゝ  
 足布とく人もやと見えはさのみ  
 おしつとく人もやと見えはさのみ

孤屋  
 赤被  
 沾徳  
 桃遊  
 其角  
 如行  
 世坡  
 利半  
 孤屋  
 芭蕉

翠々々々

遊つてよ命ありてむ小あゆみ

廿九日 有

まき面や樽の果つてぬゆぬの偏

芭蕉

ほろろくくともみ妓門のつらら

伊 子珊

き乃乃ゆけ乃乃 隈やゆ乃末

悠沈

ききあひききよきよき乃乃ゆゆ

権籬

遊りて

仙華

法香場を

環坡

ゆきあひききよきよき乃乃ゆゆ

環坡

ゆきあひききよきよき乃乃ゆゆ

環坡

ゆきあひききよきよき乃乃ゆゆ

環坡

ゆきあひききよきよき乃乃ゆゆ

環坡

ゆきあひききよきよき乃乃ゆゆ

環坡

夏部之書白

首夏

遊うを乃重源を思ふ衣うへ

兜名

衣うへ十日を予くとまはらうり

世波

旅をぬく旅ぬせり一衣更

丸美

花よりやれさとゆやうらうへ

雪美

舟のあしけきをなほのありけ

子珊

麻のの鳴き声白く一衣うへ

利牛

うの案

利牛

外せのゆやうききぬゆゆ

芭蕉

うのゆやうききぬゆゆ

芭蕉

うのゆやうききぬゆゆ

芭蕉

うのゆやうききぬゆゆ

芭蕉

うのゆやうききぬゆゆ

芭蕉

う乃そたふ若毛乃るの松明ふ  
卯の花子 柳の 名かつらふ  
洋六 喜考

歌一々

掉の歌をやうう海しりどる  
紫の葉は他より蓮あるまき居小  
ううひとや竹の子散に老と傳  
芭蕉 素堂

郭公

古中をまき二階にねううはま  
ほくまに一二の橋乃木海ま  
竹燈と月若葉まきん  
挑灯乃るに経なうむおん  
木乃れれくま橋まきや郭公  
芭蕉 杖爪 虎直 芭蕉

子規 子規 子規  
子規 子規の物くれぬ捨子小  
利半 世坡

麦

柳さふまき穂いやヤ他より  
麦の穂さふまきふらうや筑波山  
まき穂の田穂やまき穂とま  
公乃穂りと川まき穂とま  
刈りみ 麦乃白ひやまの月  
利半

麦 柳や知ぬけくもれ麦の中  
世坡

浦風やむくく 櫃乃を多れき

香水

端午

五々雨や傘ふれし 小人形

甚用

さぬおとくみ 平はつふれんを

油堂

五月よりくあすふくあるあやめ

桃液

又もあくはししあし 種五把

炭室

みよりやまき首乃 胃より甲多事

仙花

唯子の志くぬき 御子 治り水

素武

夏旗

並ねをみくく 町のはつと

野高

桔梗の 臣良あつし 是れすま

斜流

二三木 船を 舟もあつし

草町

いづ山乃刀及てぬあつさハ

権旗

いづ地やと花とをいづ葉の白

草忌

いづを 務田よりれ 炊り

五月雨

いづれやとけり人 毎丸本橋

素武

五々白のなやと川 大和川

挑障

さみさねよ小 船とあまのり

砂被

五々白やあまのり 薫花

炭室

このるを 桃液よりあつて

五月雨や 船もあつて

香水

涼

川中の 船もあつて

逆産

香味ば 27歳。 はあま のハリ か仲睦 そつか 赤川次 推理。

月影よくこく交本やま乃其  
涼一さよ 蝶よまこくる 此の枝  
以 柳を去のこくる 下るす、こ  
涼風をすくわて涼一 五條は  
す一とと去れと 柄抄の東木  
す一 竹や波洲の上はどくく  
夕中と美あまをさるはのり  
之う月か法 下るす、こま

歌一らす  
橋や三夏家机乃ありととら  
栗牙むくや 砥草す一き流さ  
その申やと 貞留のり 此を

子乙女 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

あまのつみ

山崎も 巴も 妙家 田植うた

ひるう 夕や 高津 ぬえの良

たくと せやくも すきあぬ生くらぬ

噴のあを さもさも せよす乃雲

る乞の ぬをこ 八うかり急式

管み 一なる乃 くらやう 葵

一いま くれ 蝶の ころくわさ 美の

ありうら 輝く 落る 風あり 雨

うも 夕七 探芝 智月 元峯 玄素 母坡 素寺 杉凡 正秀 里赤

尻赤

汗六

智月

水艱

乙刈

文艸

仙花

世舟

銭香 あり 怒爪

けしとよふハ鶴の栖や雲の峯  
一枝をすけふよ竹のわえり  
竹乃るや 関人志 苗つき乃るの  
成堂 仙苑

さうつまき人 僕く 酒をたむるを  
戒めりして 酒や むきりんあふ  
それとよく 志くあき けり部と  
名あふかありと 元出くわ せられ  
くれえ 汗をかき  
阿く 酒より 名あつて ありさか  
利半

あり人の別業よ せありれ 志あり  
て 揚るり 志ありか のこと なるか  
り せきとわく ありふりや 文彦彦  
波

梅之部

秋のわんせんのの  
梅と 勢と 竹の 梅と 志と

名内

名とや 又つて 名と 名と 一よき  
名とや 標元 名と 泰の 虚  
宗買と こと 名と 内 名と  
名内や 竹の 名と 名と 名と  
松陰や 名と 名と 名と 名と  
りら 夕乃 橋乃 の 名と 名と  
名と 名と 名と 名と 名と  
むきりの 竹の 名と 名と 名と

望峯ノ不盡 流波と  
唯月や 不二 又 又 又 又 又 又  
素花

七夕

笹のそふ 柵付てやほりしゆく  
そふよりええまゝやまの綯  
七夕やふりうらうらるるもみ川

其角  
孤屋  
爪若

孟蘭盆

そりきりのうらうら 影やむすり  
魂のときやとちを磔くまは内  
盆乃月ねとくと門とくきり

西堂  
李甫  
册波

胡魚

岡岡

胡魚や 唇を 渡抄るん門の垣  
胡魚や 日傭せり行 波の垣

芭蕉  
利合

秋虫

手よれえむかへうらうら手よれ  
悔りよ人のときれやうらうら  
塙際よりうらうらうらうら  
ころろきりや坐ちて 退下格の上

白岸  
管月  
大甲  
西若  
孤念

麻

友麻乃 帰をととく 友麻乃  
人のりよあまうらう

車来

麻のあま 江や 硯の 躬恒秋

素秋

旅りのよふ

近江路やうらうら 友麻乃の長

土芳

草花

三秋母乃花やまらう秋の花

桃除

花すきまきまらう

聖書

片是乃花や川をん船の端

篠籬

其乃花や白梅揚るる

夫中

其乃花よ公若く川をんや雲の裾

玄素

山神の草花をみ

草花や白雲の足ある分る

其書

園菊

菊細おくある芳れりり代

杉風

母菊も多よ味知れぬ日く形

桃隣

秋植物

柳のある本と子ともの花とを

利牛

花粟や谷よあくく蟹の甲

菰南

秋風や草子乃散のあつり

木白

箕よすく中意はりちりちの松

孤屋

さうさしの名を南空くりりとのま  
うらな海無南をんくひまーじゆま

未詳あつり天のをまらうく又ハツあり

あといつらひのあかちとこのある人乃

りくあまのりく付るるあつり

うぬ名目ハぬらむせれ乃つらうあれ

天資自海の成さうく恨むるいれ



まきとらるや石其のよのせしれく竹松  
のうのうこまあるはしはは金とれれ  
すいもちのこれとをけ乃つてまきりれ  
まき乃とれ二階のつま抱りのひらけと  
このめるあとおやうくみと信ると植田の  
とつあまきとひいへんれく抱りたせ  
くつ賢つて賢のすまきあまうつれ  
てのんお様の是とつてみまきあり  
衣食を茶床乃とまきとれおきれ様を  
お後と豆粒乃比紅糸乃色をみまきと  
茶葉の頂上とせりくくおとある人  
お申りくこのゆきくみまきとらるや

小幸子こまきおくはてあんなあま  
ひとらみのしとあやせしとありと  
ゆきまらまきあまうれあういまき  
人くお此世とまらうつれまきと  
このまきとらるやまきとらるや  
小幸とまらる

石甚とらる根とまきとらる

歌一とらる

世破

お撲取あまら秋乃のりき  
あまらあまら下や茶葉とらる  
碓乃とらる小きは抱乃白ひ糸  
秋乃とらるいあまらとらる

岩名  
大草  
酒壺  
為

茸抄や薺草も児八娘一魚  
夕良のけハ秋一紅木を武  
くろ秋と風をうらもあうらり  
秋風よ情やあふき他の上  
庵了乃序袖より一月の雲  
冬之部

初

馬や けりさむき山のきれ  
市中や本村家も産れり  
冬枯乃破よとれん心まきり  
様の中 嵐はまうんをこやく  
様の糸乃きれりやや小ね系

此草まれば乃ちまむ雀八  
此れ若ましくも小家外  
初の中や猫乃毛も三巻可  
風や膨<sup>くたき</sup>まけき猫乃面  
少<sup>く</sup>まの山は路

本枯れ根よまきり付桂皮外  
第自よまねの異種致乃まきり

時雨  
芋喰乃後へらりりり知付も  
まきりり仲の付もれりりり

芭蕉翁とわつ草をまきり  
かぬ布とやうりは付も上家の名

利合

支考

小枝

信

其角

其角

桃隴

芭蕉

支考

相笑

珍香

斐舟

八桑

桃隴

遊刀

荆口

支考

斜流

川次 60円

土の物とよめえん庭くー九三六

藤木のころり

許六

小千重虎とありの向を批やとぬ

世股

大根引とありのりせ

鞍臺小小防とありや大根引

芭蕉

津巻ととれんも虎と大根引

世披

神と送甘虎とる宵の古大根

西堂

はむこささのりもさすて

人知りの世まをさるるささか

世披

この段と先接おもはむさ外

亦峰

葛まき初と吸おもあきこまき外

利牛

足の中と小あつとをさす此の序

我百

真之庭や 甚うちとよを乃月

里东

大の二白とふ川の庭ととる此

他國より此の序とよをさす

今まきとゆり

雪

とらをふとありと教てあなり

世披

初をふたふらふやるの異なり

利半

とらをふや 蝶の崩通の苦此と

豊山

雪のりよと居 借を

伝々

雪乃日やとすやうとるさうと

横雄

雪の秋飯とるさうと

横雄

杉のそとれを綴じ表の語  
朱北舞や佐母くわりのをれ節  
いづもや生るるをくく清不切の  
岸を美北横町さるるを吹外  
浦山乃るる傳さるるを吹外  
江の舟で曲突さるるを吹外

歌ふも

あつさお袖はおと返枯母く船  
さるるを吹外糖のうる白の端  
津門乃草屋袋切ら尺十表六  
灰中鏡乃益ぬる家村く人  
白真のさるる白く杉の着

支考  
小枝  
ゆ六  
漁夕  
乙外  
嘉珍

呂丸  
芭蕉  
舟云  
智月

楳の火やあつさおと返枯母く船  
庚申やさるるに火燈乃あつさお  
清く流るる縁紐了んさるる神楽  
浦く傳るる影千雪系波のるる

すくも

蝶くさるる己の棚つる大工さ  
鶴舞 せりーとさるるに代り船  
藤つる千元後さるる多履衣  
山外のみもさるる切を伴之六  
侍よさるる氷さるる家らつあさ

茶茶

このくれり又さるる更し口事

玉川  
珍香  
其角  
全

甚甚  
万平  
舟坡  
岩香  
智月

杉風

味は  
超  
7歳  
あま  
ハル  
仲睦  
ハル  
カ  
川次  
理

とうまきぬ舞ふはう年おき  
 糸 一羽と一羽と一羽のき  
 網あつたけをく一さ年のおき  
 一のねと豆をく一さ年のおき  
 手乃くればふくまき沙汰ふ  
 世世うのぬろくれば  
 心やう一や年このり  
 け年よまへとまて心ひのり

誂諧秋之部

李由 智月 孤屋 篠統 世岐 養 傑矣

秋の光尾上の杉上離れり  
 おられく一羽ゆわくおき  
 糸のほろくはへぬか  
 世世うのぬろくれば  
 下系と字後乃まきおき  
 坊ま乃まきおき  
 是れおきおき  
 息吹くくを  
 田乃畔よま苗把く  
 及者のまきおき

孤屋 全 其角 全 孤屋 其角 孤屋 其角 其角

り燈乃引半さるるさ  
形よ拙さるるさるる乃舟  
鈴繩下紐乃さるる乃舟  
厚此下さるる乃舟  
費さるる乃舟  
むさるる乃舟  
いさるる乃舟  
さるる乃舟  
さるる乃舟  
あさるる乃舟  
手さるる乃舟  
手さるる乃舟

孤  
其  
孤  
其  
孤  
其  
孤  
其  
孤  
其  
孤  
其  
孤  
其  
孤  
其

君さるる乃舟  
様とさるる乃舟  
幸さるる乃舟  
小さるる乃舟  
孤さるる乃舟  
上さるる乃舟  
小栗さるる乃舟  
さるる乃舟

孤  
其  
孤  
其  
孤  
其  
孤  
其  
孤  
其  
孤  
其  
孤  
其  
孤  
其

其角 孤屋 五十六

杉の本末より肉よりくし  
 口より者より乃あくくして  
 ちまきより又サ新抄知り侍  
 よんやうに家より占と知て見る  
 ちやうしんしんしんをあての商  
 帷子も二層よりくぬ暑きより  
 名  
 名 惣別 家より糸入  
 焼物より池合より蒲田 鮎  
 際と空人より今りも移てくる  
 ちまきより雪踏よりちまきより  
 先伸よりちまきみゆる入舟  
 内てよりちまきよりちまきより

利牛 桃蔭 世彼 利牛 桃蔭 利牛 世彼 利牛 桃蔭 利牛

井之内よりぬき川を扇具  
 振舞いの扇よりぬき川を扇具  
 降てハヤとくくけるす  
 中島色への控乃小筋之川より  
 巧てちまきより月とちまきより  
 好物乃餅と餅とぬき川より  
 割本乃女さ玉乃高島  
 綱乃者追つきま玉よちまきより  
 早よりくくく二十八日  
 ひこるまきと餅軍乃ちまきより

世彼 孤を 利牛 世彼 利牛 世彼 利牛 世彼 利牛 世彼 利牛

480円  
466円)

後龍乃雪より 幹後もせぬ  
 内去りむ終 桃花を吹けりて  
 疾き難きなる 湯屋の高田茶  
 上りきり此干葉別むし人のそ  
 るよゆぬ月を門にさすふ  
 約賣此七ツけりしきつれ  
 婿よ門より 西中 石 元  
 けつ此 御懸もよを摺有る此  
 砂よ 曝此 ころりきき 単  
 新 留乃 葉と 抄りつて 唐此上  
 吹くくくくくく せきくくくく 水  
 川 賦乃 雪より 幹後もせぬ

世後 孤子 利半 世後 孤子 利半 世後 孤子 利半

然火は 燈きれり 此乃水  
 糸より くらくく 燈きれり 葉も  
 二三 吾を 世後もせぬ ぬ門の 松  
 る乃 乃 前 抱のさりる 干りの  
 竹の 皮 雪 踏は 踏は 交は 是て  
 梅よ 子の ぬ 雨乃 乃 乃 乃 乃  
 多 多 多 多 多 多 多 多 多 多  
 妙つ 妙つ 妙つ 妙つ 妙つ 妙つ 妙つ 妙つ 妙つ 妙つ  
 多 多 多 多 多 多 多 多 多 多  
 背 中 人 の あり 見と 六 八 九  
 多 多 多 多 多 多 多 多 多 多  
 川 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

世後 子珊 估園 石翁 杉風 井坂 利合 信々 能疎 子珊 石翁



釣白雲をわらわらと笑ふも終に其の  
 脊よりへとれをうらむり  
 柳舟りひるや 花散りと親りり  
 九ヶ葉尖るハ 月同き 枝直日  
 條系を揺る 儘くをりり 込  
 りさくしりさく 葉代 の 枝  
 言毎てかくバト 自傍をきちり  
 とまのくりさく 火とくくく 葉  
 又りさも 佛の舎と 坊と 坊  
 扶こくりりしし 賢とがふこ  
 大坂此人より なるをの月  
 俗とくくれと 世世の 葉  
 半地乃 寺北くく 葉 坂  
 干拍と日向乃 意のくく 葉  
 塩出ん 鴨此 芭布くく 葉  
 翠舟小 浮舟を云ふ 葉 葉  
 又河は 葉 葉 葉  
 又くくくくく 大崎の 葉 葉  
 又くくくくく の 正 状 乃 終 葉  
 中よりて 傍 葉 合の 終 葉  
 葉をくくくく 終 葉 葉  
 風中くくく 秋乃 終 葉 葉  
 鯉れくく 子乃 終 葉 葉  
 ちくくく 葉の 終 葉 葉

杉風  
 岱水  
 孤心  
 若言  
 桃隴  
 俗と  
 沽圃  
 子冊  
 利牛  
 杉風  
 利合  
 世世

半地乃 寺北くく 葉 坂  
 干拍と日向乃 意のくく 葉  
 塩出ん 鴨此 芭布くく 葉  
 翠舟小 浮舟を云ふ 葉 葉  
 又河は 葉 葉 葉  
 又くくくくく 大崎の 葉 葉  
 又くくくくく の 正 状 乃 終 葉  
 中よりて 傍 葉 合の 終 葉  
 葉をくくくく 終 葉 葉  
 風中くくく 秋乃 終 葉 葉  
 鯉れくく 子乃 終 葉 葉  
 ちくくく 葉の 終 葉 葉

芭蕉  
 利牛  
 孤心  
 利牛  
 芭蕉  
 丹坂  
 利牛  
 孤心  
 芭蕉  
 利牛  
 孤心  
 芭蕉

同之思すのりのつれのほろすく  
そりもま乃三月申母  
猫炭れちりそをらふ夫のほ

母坡  
孤屋  
利牛

芭蕉 母坡 孤屋  
利牛 各九句

雪のまおまは口みまん出ま  
日の出るすくのまさか  
が春を一子修り打鳴く  
あつとくまうく大名の佐  
身にあつるほもふくは月お  
粟とくくひるき畠地

杉風  
孤屋  
芭蕉  
子珊  
桃流  
利牛

此れおれをてつとむる声  
好まふくくみと居れハ切ま  
七ツのくわふをを修りま  
赤の白あつとく内は修りく  
男まうりお遠をろゆる

利牛  
多良  
杉風  
桃流  
袋水

杉風 五 母坡 三 孤屋 二  
佑園 二 芭蕉 一 石素 二  
子珊 五 利合 二 桃鄰 四  
依し 二 利牛 三 多良 二  
袋水 三

撰者芭蕉内人

志太氏

野坂

小泉氏

孤屋

池田氏

利牛

Handwritten text in vertical columns, likely a list or index of names and titles.

Handwritten text in vertical columns, likely a list or index of names and titles.

河津野

尾湯草花檀本堂を人あがらば華を偏く花の  
あら舟より河津のこの名花のこゝをまき  
お母ひやふらふ此御の旅麻草行つての事  
あつたやそののりくひにまきまきまきまき  
世のやうにふらふやま文をまきまきまき  
柳橋の津と華日くまきまきまきまき  
りつたやまのまきまきまきまきまき  
いひつたやまのまきまきまきまきまき  
てまきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまきまき

元禄二年正月

芭蕉桃青

花三十首

とりのあや

こ終まくとまきまき花のあやまき山 自筆  
まきまきまきまきまき花のあやまき 路通  
まきまきまきまきまきまきまきまき 信使  
まきまきまきまきまきまきまきまき 晨風  
まきまきまきまきまきまきまきまき 友五  
山里まきまきまきまきまきまきまき 尚白  
まきまきまきまきまきまきまきまき 去来

価480円  
体466円)

みの乃平きとく一花も挿し  
 子乃多の乃平引く身もふふ  
 下乃下井きとく一花の若  
 花の山常おとく一花の  
 又あり一花とく一花の  
 見赤乃いらはらとく一花の  
 ちと花を挿め人  
 冷汁は散とく一花の  
 一乃花は散とく一花の  
 毎乃花は散とく一花の  
 一乃花は散とく一花の  
 連とく一花の

母水  
 龜洞  
 織人  
 一井  
 後似  
 氣潭  
 舟泉  
 胡及  
 長和  
 枝  
 時歩  
 時歩

病癒の跡とく一花の  
 わしとく一花の  
 花とく一花の  
 山あひの花とく一花の  
 けり  
 花とく一花の  
 福とく一花の  
 花とく一花の  
 首  
 花とく一花の  
 花とく一花の

心苗  
 我人  
 世  
 冬松  
 冬文  
 荷  
 芭蕉

檀の木此をれはよらぬすくは 全

杜宇二十句

ほろきんと知をくものをそらて驚く時よ

るる亀北夏反月又つらん 郭云 季吟

月あをまをそら山岸をさだ 初らん不 素堂

やまうきまかよはまより 蜀魄 酒雲

魂始乃ひるまよりや 作きん 紙人

けひし子のほろのまろや 時鳥 <sup>はき</sup> 松下

流や先を轉のつく 卅巻の郭云 室五

ほろきんれくまきまむ 卅乃 廣き 柳風

あふ人のれくまきまむ 卅乃 廣き

明けまはせをほのやわらきん 流格  
 坊身息はほろくつや 時鳥 一巻  
 三巻やく流乃れくや 郭云 日

渡りく

あふまきん十りもまきまむ 風泉

流しきや森のぬ先の原まき 杏雨

あふまきや今郭まき 郭云 傘下

くくまきやカク作まき 郭云 日

まきまきまきあひまき 郭云 純可

まきまきまきあひまき 郭云

あふまきまきあひまき 郭云 智月

あふまきまきあひまき 郭云 李桃

くろくろくは美のんそ所とまは 山

月三十句

あふくと毎のくは月あは 梅吉

それうも月見の中の宿うね 湍水

月ひらつてひらうちの今も月か 一巻

魚の月とともふしは居あうり 越人

夕と夕ふお照むく月あは 昌碧

居やと森の宿は鳥や月の影 市柳

狂うとふ不ぞて海は月あは 一巻

ととまても月と月を月乃は月か 虫丸

味やと 現抱く月えう那 任他

いふやいふと月を月乃は月か 任他

名月やと月を月乃は月か 任他

名月やと月を月乃は月か 任他

名月やと月を月乃は月か 任他

名月やと月を月乃は月か 任他

名月やと月を月乃は月か 任他

名月やと月を月乃は月か 任他

名月乃乃のそとまて

あつくと月を月乃のそとまて 荷子

いつの月も流るるあつくとまて 全

名月や海も移るる山も移るる 玄本

名月や下るとりえとのむつとまて 胡及

あいつつはあつとまてむつとまて 約者

有るは一掃の心 七月の歌 一盤  
十三夜

新婦の歌 若くは 忍ぶる月夜 後  
朔日

善い子 月の影 海に果 善  
二日

乃る 命は 善い 月の影 全  
三日

懐しの心 乃る 懐しの月 塵  
四日

夕月 懐しの心 乃る 懐しの月 上枝  
五日

如日 乃る 懐しの心 乃る 懐しの月 泉  
六日

銀川 乃る 懐しの心 乃る 懐しの月 雲  
七日

懐しの心 乃る 懐しの心 乃る 懐しの月 一盤  
雪二十句

大付五  
雪の月や 懐しの心 乃る 懐しの月 共角

懐しの心 乃る 懐しの心 乃る 懐しの月 甚意

乃る 懐しの心 乃る 懐しの心 乃る 懐しの月 塵交  
かたはら 懐しの心 乃る 懐しの心 乃る 懐しの月 加生  
車 乃る 懐しの心 乃る 懐しの心 乃る 懐しの月 春



そらちとてそらちとて 秋の風はひかり  
はつちをえんち 唯ぬのふもれ 菘小  
ものくけの神のぬりち 一ツバ  
くつきまぬま 柳流又くり 名の隈  
雪降くくふる 春よこつる 花り形  
ぬ乃雪に ちとちと 枝打ん  
ゆされりや 川筋 斗をくく  
柳ちちや 柳 ちきさの乃 奇麗に  
雪乃江の大舟より 八小舟のち  
雪乃柳から 鮭くくる 声も  
雪の音 柳やや 柳の音  
つらつら 柳の音 柳の音

越人

菘菜

松芳

二水

危仙

除風

雪汗

傘下

芳川

冬文

桂夕

雪

二月の雪ぬき ちとちと ちとちと ちとちと  
あれへのちとちと ちとちと ちとちと  
ちとちと や 九千年乃つと 縄  
ねとちと 伊勢のちと 賞人を流  
ちとちと ちとちと ちとちと ちとちと  
月名のとちと ちとちと ちとちと ちとちと  
かさりとちと ちとちと ちとちと ちとちと  
えちと ちとちと ちとちと ちとちと

柳

水

芳川

雪

芭蕉

古梵

風鈴

其角

文鱗

去来

一日

路

文日ハ明ナ御一ハカモコハ  
 齒圓ク梅の花を白ひハ  
 妙ノ社老キキハ孫ノ一ノモ  
 家ハをうらけケルモ若ク梅  
 伴葉浦ヤホリ川使ヒキ製葉  
 子ノ花ハ花をうらけケルモ若ク梅  
 去年の葉ハカモコハ一ハ草取  
 小梅子葉ヤひろくむまつの  
 ト一男子形葉とあひたり  
 山はあうらけケルモ若ク梅  
 ねる一引馬はうらけケルモ若ク梅  
 一井  
 胡及  
 長江  
 萬彈  
 日  
 瑞水  
 日  
 朴什  
 冬交  
 傘下  
 冬松  
 柳風

文日ハ明ナ御一ハカモコハ  
 齒圓ク梅の花を白ひハ  
 妙ノ社老キキハ孫ノ一ノモ  
 家ハをうらけケルモ若ク梅  
 伴葉浦ヤホリ川使ヒキ製葉  
 子ノ花ハ花をうらけケルモ若ク梅  
 去年の葉ハカモコハ一ハ草取  
 小梅子葉ヤひろくむまつの  
 ト一男子形葉とあひたり  
 山はあうらけケルモ若ク梅  
 ねる一引馬はうらけケルモ若ク梅  
 一井  
 胡及  
 長江  
 萬彈  
 日  
 瑞水  
 日  
 朴什  
 冬交  
 傘下  
 冬松  
 柳風

大服 法年の主事の白ひ外  
堂并 秋の事の中 九年 邦し己  
傘 子 萬原のくらの文の相  
神 子 子 秋の事の中 春  
堂 子 子 秋の事の中 大か  
晴 子 子 秋の事の中 今  
子 子 秋の事の中 裁人  
秋 子 子 秋の事の中 今  
子 子 秋の事の中 子  
子 子 秋の事の中 日  
子 子 秋の事の中 日

防川  
昌務  
夕九  
極吉  
世水  
全  
裁人  
全  
子  
日  
日

秋の事の中 秋の事の中 秋の事の中

秋事

子 子 秋の事の中 如六  
子 子 秋の事の中 子  
子 子 秋の事の中 子  
子 子 秋の事の中 子  
子 子 秋の事の中 子  
子 子 秋の事の中 子  
子 子 秋の事の中 子  
子 子 秋の事の中 子  
子 子 秋の事の中 子  
子 子 秋の事の中 子

裁人  
世  
子  
春  
羅  
秋  
素  
時  
裁人  
子

梅の枝をわらわると又人の舟中  
冬松  
みゆきしをさむかたつたをたけりま  
あつたしる梅のまじり  
若葉

綱代両社の鳥居を述ぐ

春事の本よまさらるるあや梅の花  
長風  
うきすのつらきあまの舟  
若葉  
あや月のやまかゝあまのしめ瓶  
伊豆  
あまのくさきあまの枝  
はな  
うきすのあま声よ眠るる改申外  
日  
あまのくさきあまの枝をさむ  
日  
若葉

あまのくさきあまの枝をさむ  
あまのくさきあまの枝をさむ  
あまのくさきあまの枝をさむ  
あまのくさきあまの枝をさむ  
あまのくさきあまの枝をさむ  
あまのくさきあまの枝をさむ  
あまのくさきあまの枝をさむ  
あまのくさきあまの枝をさむ  
あまのくさきあまの枝をさむ  
あまのくさきあまの枝をさむ

接木

つよのつらさ  
若泉  
傘下

曉の鳥籠をあつるはくはうさ あさ

日

菟原く蝶糸のつらぬつくは ト枝

まきふ

ももをいせまをうくとく 浦水

日

美のあきまもよ海へこと 氣輝

ふ尾巻

くやゆきの尻つちきさ 世去

地井よまきぬ 生

主印 助

すく 共角

まろく 獲

去格 植車

川 冬文

は 春江

紫草はまの池の静を

池 素堂

風の 世水

何 越人

と 一笑

又 小春

す 一笑

さつさく後とむむやふき外  
さくれま 蟹のゆつやぬ 柗外  
さくさく 柗のつらぬ 柗外  
さくさく 牛のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外

昌記  
杏雨  
此柗  
杏雨  
松芳  
校遊  
菴  
日  
素秋  
晴番  
生林

仲春

さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外  
さくさく 柗のさき 柗外

昌記  
杏雨  
此柗  
杏雨  
松芳  
校遊  
菴  
日  
素秋  
晴番  
生林

野水 除凡 一雪 塩車  
 山岳 家海 越入 越未  
 落梧 葉梧 一井

校相の... 乃中を... 万葉...

何の... 乃重... 草刈... 麦畑...

ぼろくとして山吹ちるる 濛の音 芭蕉  
 松鳴玉平吹くく 存の文 冊九  
 山吹として少のたまれぬあし外 下枝  
 一そらと山吹のそくゆ外 日 鬱音  
 とりはあはく山吹のそくいふ外 蓬雨  
 わさやとゆくもあぬ燕外 去来  
 去年の菓の土ぬり東に燕外 俊似  
 いちとゆくとあぬえうり乃燕外 長之  
 菓の菓を吹く正しく久りぬ 長虹  
 芙蓉のよるそくそくそくそくそく 氣弾  
 友城く吹くそくそくそくそく 且菓

あり清く教りし浦のひそく 越人  
 杉ももも同じ 竹と桃の他 傘下  
 入雲玉舟と陸のひそく 友至  
 小舟ゆふは吹くぬる 鶴歸うぬ 荷子  
 樹やあはくくくくあきさるの気 兼正  
 舟やふらぬのそくけぬ 舟舟外 龜洞  
 舟さしや 漣実路くぬぬぬ 下枝  
 舟さしや油ちる舟のよるるま 舟水  
 舟さぬあはくくくくを残しぬ 日  
 初夏  
 こころもあはくくくくくくくく 路通  
 更名徳もわくくくくくくくく 傘下

味は ち超 家。あま 仲睦 つか 川次 理。



ころもくハカセさうして、んくとたて 秋 鼠 弾

首桶老人ののちなまのいへりやう

香をさのたふひけふ文舞々これら

とくさの船載入のりやうをさる

うく物とらさめは文曉はつた

替ふ様 香もあわくし 衣更 荷兮

山路あり

たうもてもくしつふふのつた

いちさつとたれとさあやんまは

橋はま乃いりてさるるさる

切りふのりてさるるを橋

ワケのあくそのあしのりて

ゆりてとさるるふとさるる

ゆあゆいさあさるるゆい

さけや下ゆくあゆは印本

上へさふのりてさるる一様

枯さあをさるるさるる

さるるさるるさるる

むさかゆさるる里乃 葵外

さるるさるるさるる

さるるさるるさるる

さるるさるるさるる

大粒ふるさるるさるる

秋 鼠 弾

芭蕉

一井

城入

不交

竹泊

純可

美儿

玄察

生林

池可

宿菜

高梧

李桃

東巡

味は 趣も 蔵あま 仲睦 つか 川次 理。

若くはのこりて捨つぬ花ふ此花

吉次

源川乃をなす

菴乃未も久くくありぬすは  
さひさひなりたね下え入るる

野水 嵐雪

伊豆

まのつらと筆まきくく螢火

落井 元輔

刈草乃るる扇ふかゆるる

一髪

窓くつき障子どのけり螢火

不交

團圞上るるき人呼きう都

川笛

石細く遊ぐれぬ波の量るぬ

長江

南苑の池と下るる水

倉帖

あはれと傳ふる袖乃けり

くく秋の序をまきく

くくくくくくくくくくくく

秋方

改乃むれく梅の一本の品を

小春

くやりやふく梅をせんくあり

杏雨

るれら我傘乃るるん

一水

扱乃病をく鐘のく

一矢

屋のむをうけり

胡及

以引く屋のまきく

見竹

口伸くく姫百合舟れ

此橋

竹乃ふふり花さく

長虹

筆此竹

去来

川次  
仲  
あま  
超  
味

岡行まじし〜〜〜〜〜  
あ〜〜〜の小舟まじし〜  
このはら小舟まじし〜  
〜〜〜の傘まじし〜

故草や〜

つ〜〜〜し〜〜〜  
は〜〜〜

は〜〜〜

や〜〜〜や〜〜〜  
お〜〜〜

つ〜〜〜無〜〜〜  
は

〜〜〜

先少の乃 新の〜  
曲は小舟乃又〜  
鴨乃果乃乃〜  
ねるの溜子乃〜  
虹乃根を乃〜  
菫乃乃乃乃〜  
抄乃乃乃乃〜  
次〜や乃乃〜  
夏乃乃乃乃〜  
菴の乃乃乃〜  
すひつ〜乃乃〜  
夕乃乃乃乃〜

味ば 超 歳。あま 仲睦 つか 川次 理。

中下不のちむむ人乃ちあしぬく  
夕魚ハ板の鳴るのうららとて  
山路まゝく夕魚又ふ心のちるハ  
名ハ屋らゆ夕魚は似てとて  
長虹

暮夏

楠も動くやうし輝乃ち夢  
舟の海路ゆるりあたるむあり  
夕魚ハテ傘めく垣植ハ  
岸くさく板もやぬまはるハ  
涼くさよ雨あくる入月影  
簾くく涼くやちるるるり白  
夜

花名乃ち石鏡や州乃ち下とて  
涼くさや楼乃ち下ゆらなる者  
挑灯乃ちとやゆらー涼く舟  
さくさくさくさくさくさく川  
吹ちくさくさくさくさく蓮う舟  
蓮みむ目ふさるまきハウくとも  
松坂  
晨正  
古梵  
河骨ふさ乃ちわらひあつれハ  
長虹  
芙水  
すくきりくさくさく乃ち清涼ハ  
俊似  
連あましく待とく結ふとらハ  
文瀾

味ばも超 歳あまハ川仲睦 つか川次理。

引きく馬よのすけりきくも火  
 かゝりしを沙をえりきりきあふ  
 虫をぬくはつてはつてはつては  
 虫介や幕をぬくえと様死  
 林のあはれはれりりるの路  
 泊陸屋後又付ふふふふふ  
 綿乃死きとぬく葉をぬくは  
 初秋  
 りりりや麻をぬくは林の風  
 柵のまやまや川うしん林のれ  
 素堂  
 越人  
 圓解

男をきき羽織と子のも白く  
 朝露をぬくはつてはつては  
 暮やぬくのつてはつては  
 あきうを乃白きはまふふめ  
 朝露と子のつてはつては  
 隣をぬくはつてはつては  
 あきうをぬくはつてはつては  
 暮やぬくのつてはつては  
 秋風やまきらららはつては  
 涼しきをぬくはつてはつては  
 素堂  
 越人  
 圓解

味は 超 藤 あま 仲睦 つか 川次 理

畦乃不<sup>レ</sup>草物<sup>ニ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>ニ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>ニ</sup>あ<sup>レ</sup>り  
 ま<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>通<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>路<sup>ノ</sup>より<sup>レ</sup>崎<sup>ノ</sup>より<sup>レ</sup>り  
 ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>體<sup>ノ</sup>甚<sup>ク</sup>清<sup>ク</sup>と<sup>レ</sup>崎<sup>ノ</sup>より<sup>レ</sup>り  
 あ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>空<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>船<sup>ノ</sup>つ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ハ  
 西<sup>ノ</sup>つ<sup>レ</sup>月<sup>ニ</sup>や<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>六<sup>ノ</sup>束<sup>ノ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>西  
 不<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>花  
 ひ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>花  
 棚<sup>ノ</sup>へ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>一<sup>ノ</sup>き<sup>ノ</sup>蒲<sup>ノ</sup>萄<sup>ノ</sup>  
 艸<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>花<sup>ノ</sup>井<sup>ノ</sup>ハ  
 と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>浦<sup>ノ</sup>船<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>為<sup>ノ</sup>ハ  
 乃<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>や<sup>レ</sup>船<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>為<sup>ノ</sup>

一<sup>ノ</sup>發  
 素<sup>ノ</sup>秋  
 芭<sup>ノ</sup>蕉  
 其<sup>ノ</sup>角  
 舟<sup>ノ</sup>泉  
 芭<sup>ノ</sup>蕉  
 其<sup>ノ</sup>角  
 伏<sup>ノ</sup>見  
 任<sup>ノ</sup>口  
 胡<sup>ノ</sup>及  
 俊<sup>ノ</sup>似

仲秋

切<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>奈<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>鳥<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>秋<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>草  
 了<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>滄<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>秋<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>扇<sup>ノ</sup>く<sup>レ</sup>れ  
 谷<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>や<sup>レ</sup>茶<sup>ノ</sup>寮<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>秋<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ  
 石<sup>ノ</sup>切<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>音<sup>ノ</sup>も<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>秋<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>れ  
 芥<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>ね<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>編<sup>ノ</sup>幅<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>秋<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>草  
 麻<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>鳥<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>ハ  
 田<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>畑<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ハ  
 山<sup>ノ</sup>崎<sup>ノ</sup>く<sup>レ</sup>麻<sup>ノ</sup>路<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ハ  
 乃<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>や<sup>レ</sup>船<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>為<sup>ノ</sup>

芭<sup>ノ</sup>蕉  
 其<sup>ノ</sup>角  
 俊<sup>ノ</sup>似  
 小<sup>ノ</sup>春  
 益<sup>ノ</sup>音  
 牽<sup>ノ</sup>下  
 一<sup>ノ</sup>枝  
 一<sup>ノ</sup>發  
 泉  
 其<sup>ノ</sup>角

ち〜ぬ人して物ひてゑるのむも  
 蔭の中よりあ〜うさ〜枝  
 〜〜とあ〜地よ〜あ〜めさ〜  
 けうあ〜と〜と〜秋乃〜  
 け〜年蒼〜  
 取も〜  
 素あ〜  
 不守乃女のぬけ〜蓮の〜  
 一本の茅の穂塵〜  
 ねのあ〜吹あ〜ら〜秋乃蝶  
 〜〜〜  
 ち〜  
 東頰  
 林斧  
 越の  
 宗和  
 越人  
 防刺  
 舟家  
 胡及  
 曉龍

風乃ま〜  
 こそ不縁とや〜きあ〜  
 よ〜  
 ま〜  
 け〜  
 暮秋  
 あ〜  
 ち〜  
 山路のき〜  
 一〜  
 高〜  
 こそ着〜  
 其角  
 越並  
 一笑  
 巴夫  
 冒暑  
 越人  
 曉龍

かくしけのみきとてんせとて東の衣  
 華おつゆ洲の人で必賃帽子 曰 其角  
 くりよまありてて事体つとねりのたり  
 可あつくりて苦さへおの持本八  
 淋しきと櫃北実落るぬえ外  
 殊る事あめりてられれ梅りき  
 芳乃種やすのくさうりちるわま  
 初冬  
 あ免つら乃をわしとて時ぬ  
 三三三の人とつらうとて  
 一物もく之舟きとて初時  
 といわれぬわりのぬんこりり  
 尚白  
 満水  
 潮春  
 路通  
 加生  
 千園  
 二水  
 澤  
 芦夕

万句集のよ  
 尺ちり連た人の平さこれ時雨  
 人を侍うる日  
 多軒をわきとてんりえさしこれ  
 泊るの乃下海のさん去くれうれ  
 後一守そりり葉さるしこれ  
 こつとてさつら乃月乃ぬさるる  
 一さあつ 柿乃葉さるさるぬより  
 このささく泣き淋しき田舎裏外  
 枇杷乃花人乃りさるて本屋外  
 事乃ゆさるのつらさるさる  
 花子の花さるれよぬれ淋し  
 野水  
 李畏  
 日  
 日  
 一盤  
 為守  
 傘下  
 炊玉  
 為枯  
 荷守



善若虫乃つらつらつるや 屏花  
まよふまよふ 奇麗なるあり 菴水  
乃つらつらつるや 奇麗なるあり 菴水  
蓮池のよきまよふまよふ 大権水  
石白乃 破れまよふまよふ 大権水  
まよふまよふまよふまよふ 大権水  
乃つらつらつるや 奇麗なるあり 菴水  
蓮池のよきまよふまよふ 大権水  
石白乃 破れまよふまよふ 大権水  
まよふまよふまよふまよふ 大権水  
乃つらつらつるや 奇麗なるあり 菴水  
蓮池のよきまよふまよふ 大権水  
石白乃 破れまよふまよふ 大権水  
まよふまよふまよふまよふ 大権水

昌若 全 一井 落梧 胡及 文鱗 卜枝 烟雲 一盤 松若 杏雨 蕉堂

乃つらつらつるや 奇麗なるあり 菴水  
蓮池のよきまよふまよふ 大権水  
石白乃 破れまよふまよふ 大権水  
まよふまよふまよふまよふ 大権水  
乃つらつらつるや 奇麗なるあり 菴水  
蓮池のよきまよふまよふ 大権水  
石白乃 破れまよふまよふ 大権水  
まよふまよふまよふまよふ 大権水  
乃つらつらつるや 奇麗なるあり 菴水  
蓮池のよきまよふまよふ 大権水  
石白乃 破れまよふまよふ 大権水  
まよふまよふまよふまよふ 大権水

此水 俊似 集 務吉 空流 林芥 李雨 空之 杜國 務吉 俊似

つさつりてまらふ葉ききたり 藤水 陸風  
赤ねをいへ何そし一多に水移り 板舟

兼題吾舟

吹くらふ舟を舟とては 柳舟  
ぬつくりし舟は舟とては 舟  
あはてとて舟とて舟とては 舟  
る舟より舟舟引出の舟  
舟舟引や舟舟と舟と舟と舟  
つ々つ々つ々つ々つ々つ々つ々  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

井とわらわのむす月を

汗吐く谷実こむ水室外 舟松  
時氣揚乃壺埋りさき氷むる舟 舟  
炭竈乃穴ぬるくやう落けり 舟  
藤簀をほけり出ると舟 舟  
火と舟にて炭里あつぬ舟 舟  
いつころ一底記せ舟舟舟舟舟 舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟

歳暮  
餅つきや門守けり舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

尚白 李下

ゆらぎの後にすくくちうゆ  
ゆるゆとく構つてゆるる葉細外  
煤くゆる梅よりけりる瓢うね  
一本

本多の月よりくろく乃くちう  
とく柿乃実出つてくちうる年  
の書よりくちうくちうくちう

とく乃く柿の実つてくちう  
門をくちうくちう 蛤一葉のひ  
田畑より風吹くよのくちうくちう

雑

年中行支内十二句

供養 燕白散

いんげんあやしくあまをくちうくちう  
まら白糸

くちうくちうくちう乃後のははくちう  
石清の臨時祭

香もくちうくちうくちうくちう  
灌件

くちう乃息やつてくちうくちう  
端午

朽も瘦く萎れくちうくちう  
施米

くちうくちうくちうくちうくちう

乞巧奠

七夕の葉をよみ七夕をよみとてよき

約迎

瓜瓞の旅乃すしそとてむむ之

撰虫

夏の蟬の足乃あれとてきり

十月更衣

五きれ衣之とて魚の苑

五節

舞姫の衣をむ指を折ふり

追儼

追儼の服をよとて鬼の面

詩題十六句

今日不知誰計舍春風甚水一時来

野水

水や一海の海とあそふ春の風

白竹落梅浮湘水

白竹乃より竹付とて林白

春風無伴閑遊也

花賣よとあそぶのちとて隣う形

花下忘帰因美景

麻入あそぶのちとて花の下

留春春不留春婦人寂寞

り来とてとてとて乃母とて

巖風吹袂衣不空復不整

綿脱と松の葉すよのころり

池晚蓮芽謝

蓮乃まよひのあまのふりて

暑月貪家何処有客来唯憶北窓風

涼光とて切ぬきより北乃す

大底四時心總苦就中斷腸是秋天

客の旅とてしつゝハあ一秋の夜

秋乃雨とて水く瓜うへんか

坐之瀧満袖長夜臥て星何欲曙天

残影燈用牆斜光月穿備

残影燈用牆斜光月穿備

物秋とて能壊色

十月に菊天氣澄々憐れ景似春花

寂寞還村夜殘雁雪中閑

白取表後佛名經

佛名乃新し腰懐く白髪をね

從容乃擲ひのこし

目立

目立

目立

目立

目立

目立

目立

目立

付木実 ありて園の如く能くそけり人乃家  
釣<sup>籠</sup> 釣籠 ありてさやほのまよふ社の里  
糊賣 あさきあ乃まきわらわむつくも  
馬糞 糞のかりりし松虫まうとつまきて

李夫人

魂在何許香煙引到焚處

かりりし乃抱つたりつらうらも

楊半妃

雲髻半偏新臨鏡花冠不整下堂來

くさる風よ常ゆきくさる藤魚の那

昭陽人

小頭鞋履の衣袋書代を照目々細七

一人不見は難矣

との秋奇やむくの雲乃候あらん

西施

宮中拾の姫眉弁不秋昔は是愛君

花弁く 桂くらく 牡丹の那

玉照君

玉貌風沙勝畫圖

とれあふもまきくぬぬ乃柳の

一目らるるささささささささささ

藤やの板や山佛能焼をまきく

社まき生ん繪書乃まきく日く那

溝秋の眠りたつら扇の那

己辰卯

海書

越人

午 水河のよき草子とを踏むとも  
未 櫻乃きふ武家乃夕食さふたり  
申 夕月 白や鶴とあるともゆり

西よあまをく生と多のゆきねは

山 獸 麻笛乃上ををつらぬあをれま  
母 鴨突乃以新長き日あし  
里 虫 枝あし虫より文以蜀漆うね  
海 虫 形りしとと鰯川より盆乃月  
川 魚 秋乃密 越川くつ火ぬり式  
牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾  
是謂人

一子と桃とく桃乃海木とね 越人

藏舟於壑 藏山於澤 謂之固我而

夜半有々力者負之而走

ひらふとく師走乃きよとく

紋聖 棄知太盗乃止

七夕と抱くすくともきむら

鏡者天

散とくく 泣あをりの八苑火うね 桂夕

紙者妻

鶉のまよふやとをねう那 市山

藤房

けくきん 吹今心時をきうまう 一井

師 壺

うろくく人々みくす 荊ヶ原 長虹

一休

ひろく乃ゆらちたり や月の雲 湍水

法皇

鳴る乃けくろひもあまうけ 鬼塚

山岩

朽く山之瘰癧減る岩乃角 湍水

海岩

苔くろく 流中をかもあがりり 今

名所

八重の子を眞をくすふ 新田 杜園

一し 眞乃骨や式ア大に山 若子

わく清乃松と花より 朋もく 長

葉一把くくく 花もく 濁水

流流はくくく 花もく 若子

流流橋彫を

多海く 鬼嶽く 花もく 會話

園くくく 花もく 若子 嶽

長徳園園く 花もく 若子

花もく 花もく 若子

花もく 花もく 若子 杜園

花もく 花もく 若子 若子

花もく 花もく 若子 若子

湖乃く 花もく 若子 若子

玄来



斗もあしを羽乃あらのみ月面

角田川み

このはれ後縁乃靴食を却る

みくしのきいふ秋を貝乃舌

いさひもさうこさしき乃都六

夕月や杖まらなり角田川

九月十三夜

唐子富をあしりよの月をさ

鳴突乃こるさういさ角田六

鳴突と置はのあかのむすこ

武彦母やしくあさるる時白

かさを根うさるん村これ

一發

皇室

破笠

芭蕉

越人

素堂

胡及

團支

舟泉

尚白

かし崎やさうりわをさく砂州ぬ

むし舟こたりにさるる日あり

終つしと生海氣を焼やふの奥

をされ乃招轉轡やをのむく

宮乃富士せまやむくむされり

さし舟や吹大さるる夕ふ非

早流乃やと見えしや鳴あを

あさ乃日や石波の中家の様拂

旅

雲雀より上るやとらうと時と那

大和玉平尾村ま

花乃陰海似る旅ねうね

伊勢 洗悪

俊似

一笑

渚水

舟水

芭蕉

如行

芭蕉

芭蕉

全

横候里と眠るく通をり  
又扱

日乃入やあゝとくち桃の空  
一髪

のしりや凄乃空の生をり  
荷子

あゝ何暇くくくくはぬを  
芭蕉

あゝ人乃饑あり  
除風

あゝまゝに涙をて笑り  
手松

寐のゝあゝ含煙者を明やまき  
冒碧

ぬとくくくくくはぬを  
松芳

あゝあゝあゝあゝあゝ  
幸下

夕まよとの大名り一ち行架  
芭蕉とて送る

あゝあゝあゝあゝあゝ  
一井

あゝあゝあゝあゝあゝ  
那那

あゝあゝあゝあゝあゝ  
舟泉

あゝあゝあゝあゝあゝ  
嵐澤

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

あゝあゝあゝあゝあゝ  
為号

荷舟橋は三原と云つて秋乃山  
 と傳りし編をさす登り  
 入月今夕をうしりこまを以  
 能まけたを 秋乃山にまぬを以  
 一井  
 品川まて人よまをこま  
 澤菴乃墓をまれ乃秋の暮  
 州松をまをうり秋乃山を  
 旅をれぬ刀うこま村しをれ  
 鳴海まて 芭蕉まをまをこま  
 うらまをまをれれを神ほまをこま  
 夏まをこま 羽織を編乃入まをこま  
 其角まをこまを以

荷舟  
 京ら  
 去泉  
 一井  
 文鱗  
 世蕉  
 竹分  
 水

天氣くくくれまをこまをの宿  
 うら尻乃まをこまをこまをこま  
 里人のまをこまをこまをこま  
 秋人まを吉田乃澤まをこま  
 まをこまをこま二人旅おまをこま  
 旅をこまをこまをこまをこま  
 又まをこまをこまをこまをこま  
 まをこまをこまをこまをこま  
 まをこまをこまをこまをこま  
 子を福守りまを田まを守まを  
 余の乃田乃桂入ぬも浮世を

越人  
 金下  
 家因  
 芭蕉  
 日  
 踏通  
 仗宣  
 落格

この冊のゆく

お花のたけを 恥りり奥の徳  
梅のゆくはあつらふるに食は

杜田  
梅舌

高冊のゆく

又母の志をうら小悪十粒をたか  
あつらふるに恥りり人をたのむつり  
さうふ入湯をゆひりり一盤  
一本乃をゆひりりあつらふるに  
肩衣を候ふゆりゆりせむの  
似たりや白髪あつらふるに麻本妻  
たつりや白髪あつらふるに麻本妻  
かたれあつらふるに麻本妻

芭蕉  
高  
日  
杏雨  
杉風  
龜河  
嵐老

うらみあつらふるにまくの垣根外

曉羅

人乃のゆくをたのむ

たれをたのむあつらふるにまくの垣根外

芭蕉

四里の人よきはるら

こけりけりあつらふるにまくの垣根外

杜田

鎌倉建長寺よき

あつらふるにまくの垣根外

裁人

あつらふるにまくの垣根外

一巻のゆく

あつらふるにまくの垣根外

荷子

古々乃のゆく

あつらふるにまくの垣根外

胤彈

櫛乃ぞよ糸糸のこころに鏡ぬか  
去来

目や遠く身やちかきよりの言  
西武

姉のこころや脈乃結は往年の言  
芭蕉

こほくのこころとけりよ直の言  
除風

老をまじりて賢先よけりよ

少年や親よまじりよ  
越人

念

妻の母よ心ある人乃妻也  
一有妻

きこぬく也妻はこころも時を  
除風

好をせくも妹もなまこころ別  
長也

むしり乃月よ立柳やさし  
文海

虫下り少柳もささくも女  
心文

こころけり 妹の母もささくも  
心棘

とよみ粉 密毎教名

そり園乃 梅妻清もや月の歌  
長也

一先くら人侍うぬれとさり  
尚白

さひり 交れよ

つまねり 家もやれ 女帯花  
荷夢

去りあくる 言はぬもつよさる  
小春

妻乃名のあくる 終は神  
越人

松の中 時多 旅乃ささる  
俊似

抱ふひ火 燈を明くいささむ  
舟泉

うさね 火を燈消さる 別れ  
嵐菘

山 柳よりのさりや 葎  
松芳

きりぬくときを忍ぶもてて居りたり  
朽きなりしやまきぬくは比神き  
昌

無常

末期よ

花もたると雨も河原泥はくりて  
守武

世もあそび連

笑ひ散つては乃ちあそびきり乃昌  
年

末期よ

南や空しくも咽のほろきん  
元順

松坂の厚瓢とらふ人のあそび

あそびのあそび

梅のつぼみなりあそびぬくもりや  
梅

あそびのあそび

あそびのあそび  
末

あそびのあそび

あそびのあそび  
梅

あそびのあそび

あそびのあそび  
梅

辞世

あそびのあそび  
梅

あそびのあそび

あそびのあそび  
梅

あそびのあそび

あそびのあそび  
梅

梅

妻乃 遠馬

とてゆく一とての里人をねらむ 自恨

あふ下ら妻乃とまらうしとて

海へまゆやわらひ心ゆかき 六才

コ新夕すうり一後

その人を刺さく形一秋乃くれ 其肩

あまねくれりる子のとをれを

ねらふ子やむしり食うよ秋の草 尚白

あゝ人の道なき

埋む火もまきやあゝこのまのま 芭蕉

旅あゝなまらりらん

あはれものゝゝぬらふ情ふり 蕉持

さる田舎くくもや多分のそれ月 お登 小春

釋教

伊勢あゝ

神垣やねらひもくはむは堅像 芭蕉

曇々くくもねらら一りねえ像 嵐埠

西行上人五百巻巻よ

そのまきくくもねらら一りねえ像 若手

ねら一遠馬

連翹やそとや白くき仔細り 胡及

くく首な垣の葉うく俗二五式 松芳

木履くくねらみたり雨乃花 杜園

はらうのそとをたたくは乃寺 冬松

つれづれ侍も健人増さる形 其角

貞享つちの辰乃紫派生一日

東照宮乃別當侍正乃山房に意

去所辻を殊多法華八幡の侍

とさきさるあれと種まね

序品乃くろく

報つた乃何のむくもあは 越人

女房乃聴て平とそくは兼

おれねくはさきあつた女成併の

あきさる志のひあくは鼻かむ声の

ほろくも屋の流や屋の乃ま 日

解つた屋上の備 俊似

古きやけつりぬくの乃董草 一芹

八玉少く

徳士乃の家聖まふて打派生次 千園

つれづれりあふん子赤れ紅牡丹 一井

夏もや本流く乃紅御影 葦葉

まのらあ

儀佩の月ま生れあふ麻乃子六 芭蕉

備伝乃そは流くあつた心 尚白

まのらあ

腰乃あまきれあえろ乃山山 一老

あまきれあ一日乃流水うあ 一笑

十如是



行りしつり流れる通し一三六 荷分

即身即佛

夏陰乃 夏を晴る人乃 佛分 愚益

厚くくひや 傍の徳なる夏衣 氣浮

けりくや 月の中あま 施餓鬼棚 荷分

おろけ乃 火をくひのうらま 撥瓦

石菴乃 施餓鬼乃 棚のくまき 文里

塊栗乃 下 梨酒をくひ白り 龜洞

たきく焼く乃 道中あま 舟を敷分 卜枝

平等施一切

捨付乃 多めり人々をくく 徳り 俊似

箱妻乃 大佛にうひ 舟分 此 為分

垣越乃 引 導 叔くをせ 成分 卜枝

あま 人 口 中の 景 物 あり して 水 結

と 結 成 不 言 不 圖 心 を 感 して

あま 七 房 を くら すとす

厚くくぬる佛より あまのぬる 荷分

あまのさ乃 真乃 其音

藝乃 沙 寺乃 鼓 かくりうて 一井

そま しく 坊 主 たり 乙 内 の 舟 卜枝

舟乃 子 不 亦 舟 とうら 法 師 小

人の あり あり あり あり あり あり

乃の あり あり あり あり あり あり

名をたて又を物なり一付る 氣津

縁念の安固滞さめく

たゞしくさの涙や直まびらけん 越人

古事乃の香

曙や伽藍くしの香又雲 善

日

香彩やうらうら二玉乃片腕 俊似

つくりし香くこぞれおしきん 一井

お森する人のまじや津くまき 文潤

千歌うるもかせりしものくれ 景

茶品七句

たの白まじりの香なりまめ 胡及

如裸者得衣

香乃見や何様捨よあまの家

如商人得主

双六乃ほひてよむくむつとて

如子得母

竹々々々おけをうらうらけ

如後得船

月乃は津乃板本きこしり

如病得醫

かゝくときを清くあふる山色

如暗得燈

秋乃夜やねひゆるきふ記

神紙

古多や名あるるる獅子殿 落石

二月はあまの事候よ

記ささきや其名の乃月の梅 落石

志んくくと梅らうるる危穴外 同

嘗もあひてこそ神乃梅 龜雨

上下乃さうぬやうに林の梅 昌碧

燈の如さうありたり梅乃中 落石

何とやうにわさうこそ梅の花 裁人

是れわくあふ梅そさうに林の梅 泉

月代もさうるや梅乃花 雨相

門あそ梅乃瑞籬れみたり 言

繪さるる人の後乃さあそ 言

花よりさき苗葉わさうる社外 李桃

ま乃後川渡さうるさあそ 好葉

此も洗乃本坊乃中の地々形 玄紫

ほくきん井糸の中を通り 龜雨

まき乃灯とつる火中々 未学

破扇乃あまふの序後々形 荷守

川系速土瘡まきれは後々形 尚白

乙か〜や里乃子取く神雲は 松芳

此乃乃あはははらまおはは 落梧

あされや絲直乃さける油筒

若菜守納

まゝまゝぬまぬまの神々  
此乃方と申候ふは秋の神楽  
於麻川秋の旅を神楽  
かつまはれ神楽を  
櫛梳や水榎うゑる煤を

祝

肩付まゝくまふぬまま

為す早乃其

貴事も竹を修ふは申す

君も代やまゝくまはれ

まゝまゝ何れまゝくまはれ

利重

冊水

昌碧

村俊

卜枝

冬文

冬文

執人

傘下

代乃秋にわはれまゝ

志まゝくまはれまゝ

先従へ梅と人乃を

芭蕉

無用

Handwritten text in a cursive script, possibly a list or account, located in the upper portion of the right page. The text is faint and difficult to decipher.

Handwritten text in a cursive script, possibly a list or account, located in the upper portion of the left page. The text is faint and difficult to decipher.

暖野集負介

流るるをわととさうとせしふくし中  
よあつて物なりきとてそそりし東  
四岬の林森りしきく花乃さそりしれ  
とんをいひて佐川田表たのすりの山  
あふなりしとととをいひて又  
妻喰し居しとととわろれり  
此の尻湯乃舟水子乃作とて芭蕉  
之母の侍りしとととそりしととと  
比田舟へ居しとととて又此のを  
感じとてとととあふととと人乃手  
に虎乃物使せしととととと退るる人

わたりて秋色をいよととととと  
物なりしととととととととと  
あふなりしととととととととと  
も實乃富老杜のこゝろあふととと  
燈屋の白を去とととと  
妻をりしととととととととと  
この文人乃るつととととと  
—ととととととととととと  
ふとととととととととととと  
槎の路も去ととととととととと  
も乃去ととととととととと  
門の石肉付園乃やととととと

素堂  
舟の  
荷兮  
越人  
水

風乃月利を初秋乃雲  
 威士の音より山もや  
 去よりまつて海乃鳴る  
 雲より後とを知らま乃人  
 はやと海へわたる雨  
 立之を松鳴垂き乃乃鶴  
 千夕つて海山山乃てら  
 陸より一を橋も咲残り  
 あつてしむをさり月来り  
 露乃牙ハ涙のやうな  
 秋城をとなく望人の妻  
 雨より西も事時め  
 水 人 兮 人 兮 人 兮 人 兮 人 兮 人 兮

さうありし利根の川舟  
 舟乃舟のてらしてを  
 舟より水に 帆織ちる  
 舟よりしときの上の堤いさ  
 狐つてや人乃るる草  
 柏木乃所之氣の比乃つくと  
 さうやうしめいあはえつる  
 舟乃氣より合より 辻木樓  
 秋よりあより里乃 返橋  
 舟よりこれ歩移る出るまより  
 うれしと志のふを破りあ他  
 切しこやう 謙は涙を  
 水 人 兮 人 兮 人 兮 人 兮 人 兮 人 兮

火の着のそひてよのあつさし  
 うんせりの又せんて人のさうんを  
 あせさしとせん地のかへしを  
 花さり事なりゆき定らん  
 折く事ぬる事か晴けり案  
 聖と事さふ月子んわさあつ  
 大根さきさきとてんわさうー  
 遠海や海よと更らん樹しと  
 けりけり海乃ちとさうん里  
 のりりや子手海よ高を解き  
 石是乃懼る事さきり案

今  
 水  
 人  
 今  
 水  
 人  
 今  
 水  
 人  
 今

夕月乃けりめ白さをうら海  
 取さる乃其を裾より引さる  
 藤の葉さきととも去しぬわさや  
 一法さしして是も古綿  
 是乃さきとさきさきしる宜祿う麻  
 事さるは比しと杉母一年棠  
 いつとさきとさきとめつと滅造  
 湯者さきとさきのさきゆしゆし  
 海やとさきとさきと川乃端  
 さきとさきとさきとやさきと内  
 秋風よ女車乃盤ねとこ  
 種とさきとさきと後海の法輪

今  
 水  
 人  
 今  
 水  
 人  
 今  
 水  
 人  
 今



時々ふみのえんさふ花の美  
 八重山吹ハもさうあふ  
 月めりてやんハ何せん  
 公やとけふおとくぬふ利  
 向すて実やるやうのゆふのま  
 垢離くく人のさるの此番  
 配不きく子真乃加減さえ  
 方うさふさるさのゆさく  
 びく報よ地つひつさく不睡  
 門とさりあふよひこむ  
 夕とさるさる野所乃菫  
 けりか達さうされもさる田派

昌碧  
 妙水  
 昌泉  
 菫  
 昌泉  
 妙水  
 菫  
 昌泉  
 妙水

並もつとさるさるりのトス  
 やんさ秋乃やいありさふ  
 つとさるさるゆさる察の窓  
 あふゆさゆさ安房の小湊  
 友の白やまらるる泥の魚  
 桶乃かつさるさふひたり  
 人あふさ眼さるさるさる  
 つとさるさるさるさる精進

昌泉  
 妙水  
 昌泉  
 菫  
 昌泉  
 妙水  
 昌泉  
 妙水

昌泉  
 妙水  
 昌泉  
 妙水

冬文  
 本書

きくくきやうく又ゆる月形  
秋草乃とくもふと経嘆きこれ  
うひさくぬらる勝お櫻とくく  
りよも赤くこの拾はむくくち  
毎月く砂乃中の木乃くく  
大嵐乃はの衣とくゆきとく  
涙又せとくち笑むく  
言もより端とくしてとくゆき  
酒乃出とく経とくくくく  
夷年成乃れもせぬおき  
くくくく双雲乃繪と先とく  
くくくくくくくくくくく

荷子  
松芳  
舟泉  
松芳  
舟泉  
松芳  
舟泉  
松芳  
舟泉  
松芳  
舟泉

月乃形や花を井乃  
灯よふもを松とくくくく  
秋珠うくくくく銀息乃く  
澄辰も入齒と夢の志ハく  
十日のまきく乃れくふく  
山里乃秋光くくく生翹  
長持やうくくくくやとく  
くくくくくくくくくく  
馬乃とくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
越姉まくくく著まあよつと  
くくくくくくくくくく

舟泉  
松芳  
舟泉  
松芳  
舟泉  
松芳  
舟泉  
松芳  
舟泉  
松芳  
舟泉

暖ふくく提燈下よむ  
けーの糸とらふまはらうまら  
味噌とらふとらふ漬さか  
美濃乃門はまらけは新分  
次方くしまあてうまあは  
まの粒赤貝とまうあうく見  
顔よりよりゆるむ忠旅しち  
まらうまらま瀑布を常衣水とさて  
そらう面をかき山口乃家  
雨乃まらまらまらまら乃口

為字  
松芳  
為字  
為字  
松芳  
為字  
荷字  
世水

引すく一車は世乃かまら  
あうまらねくも人のくまら  
月の秋旅のまらまらいつく  
一荷まらまら一荷のまらけ  
初あまらまらせれ寮乃坊主  
某畑まらまらまらまらまら  
お肥をくくまらまらまらまら  
平判あまら神を扱うま  
通路のついまらまらまらまら  
六修まらまら一懸乃まらまら  
代まらまらまらまらまらまら  
淺一費まら一節

世水  
水  
全  
全  
水  
世水  
水  
全  
全  
水  
水  
水  
水

月乃如掌付りいそくを舞  
 花咲くも心すけりあま  
 天仙夢よ冷食あはしき書  
 うきうのうけよ音経乃中  
 乃人ともあつてまねくらを  
 夕ぞろきほつてや  
 約乃やと眼月を信濃りよ早愛  
 秋乃あつて昔降極満  
 八乃月乃とてつるや  
 山乃瑞と松と根よの  
 まつたもたもたつて

全 全 水 水 水 水 全 全 全

月乃如掌付りいそくを舞  
 太鼓乃きき溜まりあつて  
 こころくしと舞する本質の景松  
 舞あつてもあつて二年  
 庭をつりて信州くつて  
 之方のおむつとあつて  
 供奉乃き鞋をきき  
 後くや木塔大系様縁の花  
 人おひまりける乃川岸

全 全 水 全 全 全

月乃如掌付りいそくを舞

抄冊一ろとて柄をくくくくくくくく

宋濂法師乃白とすむくくくくくく

秋乃疾よのすをををををををを

月よ柄をくくくくくくくくくく

扱乃柄をくくくくくくくくくく

とつりてを流と重くくくくくく

杉母いりりあきくくくくくく

まふ柄つりく柄をてより可を

使乃者よ返りりあぬくくくく

あれそれく猫乃ふを避るまふ

とくくくくくくくくくくくく

大勢乃人よ法華とをきくく

背のりよ泡瓶漚くくくく

管上柄もふく柄も管法く

秋のりくきれ細みくくく

りくくくくくくくくくくく

二條をくく書きらふまのゆく

花乃かきくくくくくくく

さるのく柄乃くくくくく

うち強く浦の甚屋乃以て

内へをのりてわくくくく

碎さぬのあのかくくくく

人

傘下

人

人

人

下

下

人

下

人

人

下

下

人

人

下

下

下

多くあつたあゝ雨乃落中  
 歌合初古鎌首まのり  
 ちと秋立乃こまちくひり  
 灯甚乃油をりして押く  
 白とねをせんまきりくも  
 予く風よ急のころまのり  
 半ハこらんれ籠や乃秋  
 ちつくと有る影の秋は似て  
 人の徳よハつりいとれ  
 けまりくく爪や直まのり  
 干せ海邊乃ころり小町中  
 ねるくく小波乃春の音付か

人 日 下 日 人 日 下 人 下 人 下 人 下

皆同まのり 念佛 人

田 樂されく 保勝 人

保川の歌

厚くもあつたあゝひまや  
 にはあおあゝこのはの月  
 春なる海流新鹿めつらん  
 伊をともあれく秋の夕なれ  
 瓢箪乃大まきく石をりや  
 風ふりくれく 帰る 人  
 ちかろくそ安ハ是名新の地

人 人 人 人 人 人 人 人



さし(さ)くは文字同(さ)くは  
い(さ)くは庄乃(さ)くは葉や  
結(さ)くは子乃(さ)くは糖(さ)くは  
印(さ)くは注(さ)くは義(さ)くは  
田(さ)くはと(さ)くは野(さ)くは

蕉人蕉人芭

其角

三(さ)くは乃(さ)くは天(さ)くは

其角

菊(さ)くは乃(さ)くはと(さ)くは

其角

注(さ)くはと(さ)くは

其角

幽(さ)くは乃(さ)くは

其角

穉(さ)くは乃(さ)くは

其角

空(さ)くは乃(さ)くは

其角

あ(さ)くは乃(さ)くは

其角

い(さ)くは乃(さ)くは

其角

や(さ)くは乃(さ)くは

其角

浜(さ)くは乃(さ)くは

其角

魚(さ)くは乃(さ)くは

其角

そ(さ)くは乃(さ)くは

其角

あ(さ)くは乃(さ)くは

其角

饅(さ)くは乃(さ)くは

其角

饅(さ)くは乃(さ)くは

其角





川の舟のく牧まうらぬ里の言  
 川越くかた城下ののこち  
 瘡瘻良の遠とる和楽の里  
 唱二奇ハあしん声やとりや  
 ふいふみるこまわくのこまき  
 後そひよふとりのこまき  
 とおとりの他あまのこまき  
 何物をこまきとる浪人  
 意物をこまきとる一ツ脱  
 唯月をこまきとる月の月新  
 志のあひ群てはつる女家  
 けさふの医者乃後家や

全人 全人 全人 全人 全人 全人 全人 全人 全人 全人

ろる花よ目をらるれもせ  
 よよこまきとる何さう人  
 高きをこまきのゆゑ相のあよ  
 目のみしきとる乃新記  
 山川で移の答物とる人  
 妙と遠切とる人  
 ねあよまよ押合の草外は  
 あいこらも樵の萩  
 川越の歩よまれ秋の雨  
 ねうと痛う顔のまこまき  
 けうせことわりあくらん標の下

舟水 落梧 同 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

とかきあふはのうきこひ  
 ありぬの端をむうと水飲て  
 こころう知をまはせむ 傍  
 峯乃生まわちあわさるを見せり  
 旅 ともたうちのん 夢 夢 夢  
 章のこゝろをまはせむとも一文字  
 下戸の皆いく月のねをるき  
 耳や歯やともうても花の散るを  
 こゝろをたうちをるなり乃 初年  
 いつすも夢をまはせむ此はくは  
 山伏のてんきうはあり  
 くらうくとくはむらうとる車

桔 水 日 指 水 桔 水 桔 水 桔 水 桔

挑灯 ともく 位 園 へ ともく 挑  
 何れとほく人髪と指おむい  
 去らくおといそぬつれあき  
 くらうくとくはむらうとる車  
 今 府 中 以 給 終 ち ち ち  
 雨やともく雲のちきる、面をや  
 柿あさうちの 例 の 蓮 ち  
 初ふきく肉をささりれむ十る  
 寂しきぬと女夫居るまわり  
 ちを上のよめをささるちをさ  
 黍りてんやはいあへの酒  
 初るの干 眞 備るこころの初

水 桔 水 桔 水 桔 水 桔 水 桔 水 桔

清くろむを先へくくくく  
まるるろくろくろく  
終るるろくろく

水 目

一里乃山崖をまわつて  
かきふの先の瓶水  
さきくさや西本を引は流  
有る名をいれはよふ人  
夕月の入きは早き塘さ  
たろくに鯽をつくく心  
里海く湧きよ二三日  
まじりまじりまじり

胡及 一井 長切 荒澤 胡及

向のれても流す物のさき  
昔を移してきく切布く文  
くくくく疎紀をいれ湯  
さきゆく表守の裁乃名細  
かきゆくさや西本を引は流  
有る名をいれはよふ人  
夕月の入きは早き塘さ  
たろくに鯽をつくく心  
里海く湧きよ二三日  
まじりまじりまじり

一井 荒澤 胡及 長切 一井 胡及 荒澤 胡及 長切

いふ事一...の...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

...  
一井 菖草

板屋...  
一井

...  
一井

...  
一井

...  
一井

...  
一井

...  
一井

...  
一井

...  
一井

...  
一井

...  
一井

...  
一井

...  
一井

抄れをいひ乃道きと云く千金花浪花  
 日けさ出山乃玉波ちうあもあきんく  
 あふりぬれ *Suikoden* *Suikoden*  
 かんじあぢあぢいん *Suikoden* *Suikoden*  
*Suikoden* *Suikoden* *Suikoden* *Suikoden*  
 と海神乃んく *Suikoden* *Suikoden* *Suikoden*  
 ともかたは *Suikoden* *Suikoden* *Suikoden*  
 夢のともあきく *Suikoden* *Suikoden*  
 世小枝乃き *Suikoden* *Suikoden* *Suikoden*  
 夢人もいへ *Suikoden* *Suikoden* *Suikoden*

抄れをいひ乃道きと云く千金花浪花  
 日けさ出山乃玉波ちうあもあきんく  
 あふりぬれ *Suikoden* *Suikoden*  
 かんじあぢあぢいん *Suikoden* *Suikoden*  
*Suikoden* *Suikoden* *Suikoden* *Suikoden*  
 と海神乃んく *Suikoden* *Suikoden* *Suikoden*  
 ともかたは *Suikoden* *Suikoden* *Suikoden*  
 夢のともあきく *Suikoden* *Suikoden*  
 世小枝乃き *Suikoden* *Suikoden* *Suikoden*  
 夢人もいへ *Suikoden* *Suikoden* *Suikoden*



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a note, written vertically on the right page of the manuscript. The text is contained within a rectangular border.

長月九日





